

シンポジウム

「再葬墓と人面付土器のふしぎ」開催

◆来場者口々に「面白かった!」◆

1月31日、会場となった市文化センター小ホールは、朝10時から夕方4時半までの、長時間にわたる催しにも関わらず、最後まで会場は満席。5人の先生方が、難しいと敬遠されがちな考古学のお話を、私達の身近な生活と比較しながら、わかりやすくユーモアたっぷりに解説してくださいました。終了後、会場を後にする方々は、口々に「面白かった」「楽しかった」と、満足そうな笑顔で家路についていました。



◆大物講師揃い踏み◆

今回のシンポジウムは、石川日出志氏（明治大学文学部教授）、品川欣也氏（東京国立博物館）の基調講演と、茨城県を代表する研究者、川崎純徳氏

（茨城県考古学協会々長）、阿久津久氏（県北教育事務所埋蔵文化財指導員）、鈴木素行氏（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 文化財調査事務所々長）による県内再葬墓遺跡の報告、及び大物講師全員による総合討議と盛りだくさんでした。

◆再葬墓と人面付土器は謎だらけ?◆

まず石川氏からは「再葬墓と人面付土器」というテーマで次のような基調講演がありました。

弥生時代は、縄文時代の文化を受け継ぎつつ、大陸から伝わった灌漑による稲作が始まった時代だが、西日本に比べ、東日本は遅れて弥生時代に入った。その東国の弥生時代の前期から中期前半頃まで（2400年から2200年前）行われていた墓制が「再葬墓」である。再葬墓とは、死者を一旦埋葬するなどして骨化させた後、骨をつぼに納めて再び埋葬するもので、現代の我々からすると特異な葬法に感じられるが、火葬骨をつぼに納めて埋葬する現在の方法とほとんど同じである。再葬墓の穴には複数のつぼが納められていることが多く、このような墓制を行ったのは、当時ムラが小規模化して分散し、ふだんは離れて生活する縁者たちが、葬儀を共に行うことで互いの関係を再確認するためではなかったか。これは現在の葬儀にも通じるものである。再葬墓に使われた土器の中には、まれに人面付土器が含まれてい

るが、泉坂下遺跡の人面付土器は最も優品であり、市内の小野天神前遺跡や那珂市の海後遺跡など、茨城県北部のこの地域が分布密度、芸術性ともに最も高い。泉坂下遺跡は保存状態も抜群で、謎の多い弥生時代の東日本を知るために重要な遺跡である。

続く品川氏は「縄文の顔、弥生の顔」というテーマで、人面付土器の起源や人面表現の違いについて、縄文時代と弥生時代の遺物を示しながら次のようにお話しくださいました。

縄文時代草創期の土偶や岩偶は、人体の特徴を表現することによって性（多くが女性）を示すのみで顔の表現がなかったが、前期から中期に遮光器土偶やハート形土偶、みみずく土偶など地域毎に多彩な表現が現れる。中期以降には土偶だけでなく土器にも表現され、後晩期には土面も加わり、一般的には顔を表現しない岩版や土製品の一部にも見られるなど、器種も顔の表現も多様である。これら人面を付した器物は子孫繁栄や豊穡を祈るための呪物と考えられるが、晩期の土偶には死者とともに埋められた例も出てくる。大型で完形品が多く、黥面（顔の入れ墨）表現が見られ、弥生時代の土偶や土偶形容器へと受け継がれる。弥生時代になると、顔を表現する器物が土器や土偶等に限られるようになり、人面も黥面表現の割合が高くなりバリエーションが少なくなる。また、出土する遺構が再葬墓であるなど性格も限定されてくる。土偶形容器の一部には乳房の表現もあるが、人面付土器は顔のみの表現のため性を特定できない。

人面表現を施した土器の出土数が少ないことは、縄文、弥生時代に共通する。

◆なんと来場者の8割が市外の方?!◆

県内の海後、小野天神前、泉坂下の各遺跡の報告は、調査者による現場写真をふんだんに使ったもので、来場者は身を乗り出して聞き入っていました。



続く総合討議は、資料館に寄せられた質問に対して講師が答える形で進み、中には、小学一年生の率直で素朴な疑問に、東京国立博物館の研究者が「わかりません、まいりました」と謝るシーンもあり、場内は学術的ながら和やかに質疑応答がはずみしました。

この催しの来場者160人余りの内市民は2割にすぎず、8割が市外の方。うち半数が遠くは長野、宮城など県外から足を運んでくださった方々でした。これを喜ぶべきか悲しむべきか、主催者としては複雑な心境ですが、泉坂下遺跡や人面付土器に、集客力があることは確かでしょう。